

没後 50 年

藤田嗣治 本のしごと

文字を装う絵の世界

Léonard Foujita Private on Works

2018年 4月14日(土)ー6月10日(日)

目黒区美術館

午前 10 時ー午後 6 時 (入館は午後 5 時 30 分まで)

月曜休館 (ただし 4 月 30 日(月・休)は開館し、翌 5 月 1 日(火)は休館)

一般 1,000(800)円、大高生・65 歳以上 800(600)円、中小生以下無料
 ※ 障がいのある方は半額・その付添者 1 名は無料、()内は 20 名以上の団体料金
 ※ 目黒区在住、在勤、在学の方は受付で証明書類をご提示頂くと団体料金になります
 (他の割引と併用はできません)

主催：公益財団法人 目黒区芸術文化振興財団 目黒区美術館

監修：林洋子(美術史家) | 企画協力：株式会社キュレーターズ



藤田嗣治 1928 年頃 撮影：アンドレ・ケルテス
 ullstein bild / Uniphoto Press

目黒区美術館は、明治以降、海外で絵を学び、また活躍した日本人作家の作品収集を基本方針の一つとして、1987(昭和 62)年に開館しました。なかでも、1913(大正 2)年に渡仏し、1920 年代にはパリで「画壇の寵児」となった藤田は、当館のコレクション形成にとって重要な作家で、開館前からその作品の収集を始め、特に戦後藤田と交友したアメリカ人フランク・E・シャーマンの旧蔵コレクションをまとめて収蔵できたことは大きな成果でした。そして、開館の翌年に開催した「レオナルド・フジター絵と言葉」展は、画家・藤田が絵画制作とともに、フランスで手がけた「挿絵本」を網羅的に紹介した初めての試みでした。その後、「藤田嗣治と愛書都市パリ」(2012 年、渋谷区立松濤美術館、北海道立近代美術館)、「藤田嗣治 本のしごとー日本での装幀を中心に」(2013 年、千代田区日比谷図書文化館)などが開催され、藤田の挿絵本は多くの方々にも知られるようになりました。

2018(平成 30)年は藤田嗣治の没後 50 年にあたります。これを記念し、目黒区美術館では、藤田の画業の中から挿絵本を中心に紹介する展覧会を再び開催いたします。

1886(明治 19)年東京に生まれた藤田嗣治は、東京美術学校(現在の東京藝術大学)の西洋画科で学んだ後、1913(大正 2)年、26 歳でフランスに渡ります。1919 年、サロン・ドートンヌに出品した 6 点すべてが入選し、1920 年代初頭に発表した乳白色の肌をもった裸婦像は、藤田独自の表現として当時のヨーロッパで高い評価を得ました。フランスで画家としての地位を確立した藤田は、絵画だけでなく挿絵本の仕事にも積極的に取り組むようになります。19 世紀後半から 20 世紀にかけて、希少性の高い挿絵本は愛書家たちの収集対象となっており、藤田がパリに渡った当時のヨーロッパは挿絵本の興隆の時代だったのです。1919 年、藤田は初めての挿絵本『詩数篇』(*Quelques poèmes*)を手がけ、1920 年代には 30 冊以上の挿絵本がフランスで出版されました。すでに挿絵を手がけていた他の画家たちを凌駕するこの仕事量は、当時のフランスでの藤田の人気を反映したものであると同時に、藤田自身が挿絵本の世界に魅せられていたことを物語ってもいます。

本展では、戦前のフランスで発行された藤田の挿絵本、1930 年代から 40 年代の日本での出版に関わる仕事、1950(昭和 25)年フランスに移住した後の大型豪華本の挿絵などを中心に、藤田嗣治の「本のしごと」をふり返ります。また、絵画や版画といった「絵のしごと」、さらには藤田が友人に送った葉書や絵手紙、手作りのおもちゃ、陶芸作品なども同時に展示し、藤田の幅広い創作活動を紹介します。

※ 本展は、2018 年 1 月、西宮市大谷記念美術館でスタートし、目黒区美術館、ベルナール・ビュフェ美術館(6/23 ~ 10/30)、東京富士美術館(2019 年 1/19 ~ 3/24)を巡回いたします。

※ 本展では、東京国立近代美術館所蔵の藤田嗣治旧蔵本を中心に、各開催館蔵・個人蔵の挿絵本を併せて展覧いたします。また、油彩、水彩、版画などの作品は各開催館の館蔵品を中心に構成します。

展覧会構成

* 書籍は、和文名称で記載しています。

しじゅうから

序章 絵と言葉への前奏曲

藤田嗣治は、1910(明治 43)年に東京美術学校(現在の東京藝術大学)の西洋画科を卒業後、1912(大正元)年に鴫田とみ(通称、登美子)と結婚。そして、翌 1913 年に念願だったフランス留学のため、一人パリへ渡りました。とても筆まめだった藤田は、家族や友人に多くの書簡を送っていますが、その中には、絵と文字の融合というべきものが数多く含まれています。

ここでは、初めての渡仏後、日本にいる妻とみに宛て書かれた手紙や藤田が 10 代後半の時に親友に送った絵葉書などを紹介します。

2 章 日本での本に関わる仕事と様々な制作

1929(昭和 4)年、17 年ぶりに日本に帰国した藤田は、わずか数か月という短い滞在の中、初のエッセイ集『巴里の横顔』を刊行し、他にも本に関わる仕事を手がけました。パリに戻った後、1931 年にブラジルへ入国し、中南米を経て 1933 年に再び日本に帰国した藤田は、画家としての仕事とともに本の仕事も再開し、書籍の装丁、挿画だけでなく、雑誌の表紙、新聞連載など幅広い仕事を行いました。敗戦後の日本で戦争協力者として非難された藤田は、1949 年 3 月に日本を離れ、ニューヨーク経由で 1950 年パリに戻りました。

2 章では、1930 年代から 40 年代の日本で発行された藤田の本に関わる仕事を展覧するとともに、戦後、藤田と親しく交友し、作品のコレクターとしても知られたフランク・E・シャーマンが受け取った絵手紙のほか、藤田が制作した陶器や手作りのおもちゃなどシャーマン旧蔵の作品などを小特集で紹介しします。

3 章 戦後フランスでの出版

1950(昭和 25)年フランスに戻った藤田は、1955 年にフランス国籍を取得、さらに 1959 年にはカトリックに改宗し、レオナルド・フジタとなりました。1968 年スイス・チューリッヒで亡くなるまで、藤田は日本に一度も戻らず、フランス人として 81 歳の生涯を終えました。戦後のフランスにおける藤田の本の仕事は、その量では 1920 年代には及びませんが、豪華な挿絵本が何冊か残されています。ここでは、フランスの古文書学者 ルネ・エロン・ド・ヴォルフォス著『魅せられたる河』(1951 年)、ジャン・コクトーの文章に藤田が挿絵を添えた『海龍』(1955 年)、パリの風俗や社会、伝統や文化をテーマにした『しがない職業と少ない稼ぎ』(1960 年)、『四十雀』(1963 年)など、この時代に手がけた代表的な豪華本を紹介します。

【出品数】(予定)

- ・ 書籍タイトル数(雑誌も含む) = 100 タイトル
- ・ 作品(絵画・立体など) = 約 40 点
- ・ 書簡(葉書・手紙) = 約 40 点

※ 書籍の挿絵は一部額装で展示します。

※ 書籍は同タイトルの本を複数冊展示するものもあります。

1 章 パリでの出版

藤田が初めて手がけた挿絵本の仕事は、1919(大正 8)年の『詩数篇』でした。著者の小牧近江はフランス文学者、翻訳家、社会運動家としても知られており、1910 年から 1919 年までパリに滞在し、藤田とも親しく交友していました。この本の仕事を皮切りに、1920 年代から 30 年代にかけて、藤田は数多くの挿絵本をフランスで手がけることとなります。日本への郷愁を思わせるテーマ、フランスでの生活から生まれたイメージなどを銅版画、木版画など様々な手法で表現していきました。

1 章では、戦前のフランスで出版された本の仕事を紹介します。

小特集 1 シャーマン・コレクションと藤田嗣治

目黒区美術館は、アメリカ人フランク・E・シャーマンが収集した藤田の作品コレクションを収蔵しています。シャーマンは、GHQ の民政官として来日し、戦後の日本で、多くの日本人画家や文化人と交流し、美術作品も多数コレクションしました。2 章で紹介する作品のほか、各章で展覧する当館蔵の水彩や版画もシャーマンの旧蔵品でした。ここでは、そのほかシャーマン旧蔵の藤田作品を紹介します。

小特集 2 藤田嗣治と猫

「猫」は藤田が好んで描いたモチーフの一つでした。猫の姿態をよく観察し、猫たちの一瞬の仕草を画面に捉えた藤田の絵からは、猫を愛して止まない画家の優しい眼差しが感じられます。ここでは、1930 年にフランスで刊行された『猫の本』の挿絵を中心に、1950 年刊の『夜と猫』、リトグラフや水彩で描かれた猫を展覧します。

関連イベント

特別講演会

「藤田嗣治 ―〈絵〉と〈言葉〉」

講師：矢内みどり(美術史家)

日時：4月22日(日) 14:00～15:30

定員 70 名(先着・席に限りがあります)、聴講無料(ただし当日有効の本展観覧券は必要)

※その他、本展会期中の土日に、当館学芸員によるギャラリートツアー、展覧会や所蔵作品についておしゃべりする「大人のための美術カフェ」の開催を予定しています。詳細は当館ウェブサイトでご確認ください。

展覧会図録

下記図録を、本展開催に合わせて、当館1階ミュージアム・ショップおよび当館ウェブサイトのカタログショップで販売をいたします。

『藤田嗣治 本のしごと―文字を装う絵の世界―』

企画・構成：西宮市大谷記念美術館、株式会社キュレーターズ
監修：林洋子

発行：株式会社キュレーターズ ©2018

A5版 | 320ページ

定価：2,750円(税込 2,970円)

開催情報

タイトル	没後 50 年 藤田嗣治 本のしごと ―文字を装う絵の世界―
会 期	2018 年 4 月 14 日(土) – 6 月 10 日(日)
会 場	目黒区美術館 (東京都目黒区目黒 2-4-36)
開館時間	午前 10 時 – 午後 6 時 (入館は午後 5 時 30 分まで)
休 館 日	月曜日 (ただし 4 月 30 日(月・休)は開館し、翌 5 月 1 日(火)は休館)
観 覧 料	一般 1000(800)円、大高生・65 歳以上 800(600)円、中小生以下無料 ※障がいのある方は半額・その付添者 1 名は無料、()内は 20 名以上の団体料金 ※目黒区在住、在勤、在学の方は受付で証明書類をご提示頂くと団体料金になります(他の割引と併用はできません)
主 催	公益財団法人目黒区芸術文化振興財団 目黒区美術館
監 修	林 洋子 (美術史家)
企画協力	株式会社キュレーターズ
交通機関	JR 山手線・東急目黒線・東京メトロ南北線・都営三田線 「目黒」駅(西口)から徒歩 10 分 東急東横線・東京メトロ日比谷線 「中目黒」駅から徒歩 20 分 東急バス 「権之助坂」(目黒通り)下車徒歩 5 分、「田道小学校入口」(山手通り)下車徒歩 3 分

広報写真

本リリース掲載の写真図版「藤田嗣治 1928 年頃 撮影：アンドレ・ケルテス」のほか、図版は当館ウェブサイト上、本展紹介覧に掲載の図版のうち 3 点(《円形テーブル》、『魅せられたる河』挿絵、『イメージとのたたかい』挿絵)を本展広報用写真として提供することができます。ただし、使用に関する諸条件があります。広報用画像をご希望の方は、本展担当者(天野)までお問い合わせください。こちらから折り返しご連絡いたします。

なお、本展広報用写真の使用条件以外での使用、およびその他の藤田嗣治の作品図版の掲載をご希望の場合は、別途、著作権使用許諾の申請および著作権使用料が必要となります。

本展の問い合わせ先

目黒区美術館 展覧会担当(学芸) 佐川 / 広報担当(事務) 天野

〒153-0063 東京都目黒区目黒 2-4-36 tel. 03-3714-1201(代) fax. 03-3715-9328

e-mail: mmatoffice@mmat.jp http://www.mmat.jp